

八月四日朝、雲取山荘を出発し、三条ダルミ、飛龍山へと歩を進める。空は暗く霧雨が降ったかと思うと、木の葉の間から日が差し込むという不安定な気候である。我々は、熊笹の中の道をひたすら歩いたのだが、蜂や蛇の大群に追い立てられたため、ろくに休憩をとることもできず、前半は比較的早いペースで進むことになった。

飛龍山を越え、将監峠を過ぎると、もう午後二時半、まだ先は長い。なにやら雲行きが怪しくなってきた。真つ黒で分厚い雲が辺りを覆っていく。その時である。「ダーツ」と勢いよく大雨が降り始めた。急いで雨具をつける。ただもくもくと歩くのみだ。

道は山腹につけられた巻き道であったが、数年前の台風の影響か、道が百メートルも崩壊しているところが何箇所もある。対岸に渡れないため、崩壊地沿いに下り、不安定な

橋を渡り、そして登り返す。すこし行くとまた崩壊地である。足場に気をつけながら滑した沢を渡る。また登り返し。なかなか前に進まない。今度は、つい先ほど崩壊した場所に遭遇した。道は一メートルほど切れているのだが、脇に逃げられない。山歩き経験の長い先達たちも、困惑した表情を隠せない。先駆けを務める高尾山の戸田令定師が満を持して、草木を掻き分けて側面を登り始めた。身長より高い草木が、先を行く戸田師の体を隠していく。我々も一人一人草木にしがみ付きながら跡を登っていく。数メートル登り、崩壊地の上を横切り、そして足場の悪い斜面を下る。ぬかるんでいるうえ、身を確保するには頼りない枝たちをつかまざるを得ず油断できない。それでも、下から手足を置く位置をしっかりとご指示いただき、なんとか無事に下りることができた。

先を急ぐ山道において、ある種のもどかしさを伴う。まだ着かないのか、気がじれる。そろそろ六時が近づいてきた。ますます暗さを感じるようになった。

一人が法螺貝を立てた。ぶおーっという音は静まりかえった山々に響き渡る。さらに他



山の靈気の中で力を入れての読経

に相方の立てた貝の音が次第に大きく聞こえてきた。道を曲がると、煙突から上がる煙と古い屋根の小屋が垣間見えた。雲取山荘を出て、早十時間以上が過ぎていた。

あたりはもう日が落ちかけていた。六時十分。何とか暗くなる前に着くことができた。

そこには地元山梨の鈴木友浄師と深川不動堂の安田明城師が驚い握手で我々を出迎えてくれた。二人はここから本隊に合流する。小屋番の方から、皆に熱い熱い一杯の緑茶が接待された。その美味たるや、全身に染み渡り、蓄積した疲労が頭の後ろから抜けていく音が聞こえるかのようであった。

山道を一步一步歩いていると様々な思慮が脳裏をよぎるものである。しっかりと地に足を付け、自身の体重を感じながら登り下りを繰り返す。たとえ大勢で登っていても、物言えぬ孤独を感じることもある。また、日々の生活では聞くことのできない音を聴き、普段気付くことのない香りに触れ、今までに見たこともない景色に出会う。様々な新鮮な情報が眼、耳、鼻、肌などを通し、自身に吸収されていく。まさに山の靈気とでも言うべきであろうか、それらが全身から取り込まれていき、自身と調和していく感覚を味わうのは、自身もその山の一部であると認識していく過程なのであろうか。

武州三峰山より甲州金峰山に至る 奥秩父 修験者の道 ③

東京都教区
東覚寺副住職

小宮 俊海

なかなか先は見えず、疲労の色が濃くなってきた。言葉の交わすことも稀になり、ただただじっと押し黙って歩を前へと進める。空を雲が厚く覆い、森の大樹たちが日光を遮り、いつそう暗さを感じる。不安な思いがもたげられてくる。道は尾根をまながら進むため、大きく蛇行している。それは

の人が首をつないでいく。そんなとき何かが聞こえた。風の音だろうか。尾根の向こうから、かすかに「六根清浄!」確かに人の声だ。今日笠取小屋に入った同行の師の声に違いない。直ちに法螺貝で応答する。皆の顔に活力がみなぎった瞬間である。鬱蒼と繁茂する道を進み続けていくうち

そこには地元山梨の鈴木友浄師と深川不動堂の安田明城師が驚い握手で我々を出迎えてくれた。二人はここから本隊に合流する。小屋番の方から、皆に熱い熱い一杯の緑茶が接待された。その美味たるや、全身に染み渡り、蓄積した疲労が頭の後ろから抜けていく音が聞こえるかのようであった。



川崎大師藤田御貫首

大導師は成田山橋本照総猊下

大山御貫首



多数の法類寺院・法縁寺院の皆様が秀順大和上を偲んだ



法要後薄っすらと雪化粧した先師墓地へ大山御貫首外遺弟が墓参された

大本山高尾山薬王院中興第三十一世貫首 (十二月九日)
大僧正 秀順大和上十七回忌法要厳修